
Next Level ~ 輝ける切札 ~

W-sword

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Next Level 輝ける切札

【Nコード】

N2066R

【作者名】

W - s w o r d

【あらすじ】

人は人生の間で何人の人と出会い、影響されるのか……。この物語はトレーディングカードゲーム『デュエル・マスターズ』を通じ、様々な事件に巻き込まれながら、大きな戦いに挑むことになる少年達の成長を描いた物語である。

Level1:『トランプ』（前書き）

この小説は『デュエル・マスターズ』を題材にした小説です。

あくまでもフィクションです。

実在する地名、氏名年齢住所電番などとはまったく関係がありません。

なおカードの効果などはココ(<http://www27.atwiki.jp/duelmasters/>)で調べるといいと思います。

Level 1:『トランプ』

土曜日の午後。休日の静寂に包まれたその場所は、静かな情熱を胸に戦う男達の戦場と化した――。

Next Level へ輝ける切札へ

町の外れにある小さなカードショップ『トランプ』ではその日あるカードの大会が行われていた。

「デュエル・マスターズ」。今、日本で人気のあるカードゲームである。

ルールが簡単で尚且つ奥が深いというそのゲーム性により、発売開始から爆発的な勢いでそのプレイ人口が増えていき、昨年行われた全国大会では100万人以上の参加者が頂点を目指した。

全国大会の頂点――「デュエルマスター」はすべてのデュエリスト（「デュエル・マスターズ」をプレイしている人の総称）が目指す場所であり、そこを目指してデュエリストは日々その青い炎を纏ったカードを使い戦っているのである。

『トランプ』の大会――デュエルロード（DR）ではほぼすべての試合が終わり、今決勝戦が行われている。

そのテーブルにはギャラリが集まり、静かにその戦いを見守っている。

盤面は、多少赤いYシャツに身を包んだ少年の方が有利に進んでいた。

彼のYシャツの第一ボタンはきっちりと閉められ、その上に羽織つ

た黒いベストは彼の瞳の色に見事にリンクしている。

対して、彼の対戦相手である青年は、もう気温が20度を越す春だというのに長い厚手の黄色いパーカーを着ていた。その上に着ているダウンも加わりさらにこの季節に不釣り合いの格好に見える。

もうすでに青年のシールドは2枚削られている。少年のバトルゾーンにある《ドスコイ・イチバンボシ》の能力を、攻撃しタップされている《アクア・ドッペル》に与えたからだ。

彼のバトルゾーンには、他にも《幻緑の双月》《シビレアシダケ》の小型クリーチャー2体がいたが攻撃できずにいた。青年のバトルゾーンに《白騎士の絶対防御マツコル》や《白騎士の預言者ティリオス》《白騎士の精霊アスティノス》の3体のブロッカーが並んでいたからだ。

デュエルはすでに終盤。先に手札の“切札”を使い切った方が負ける。

先に動いたのは少年の方だ。

「俺のターン。《アクア・ドッペル》を進化！《爆裂大河シルヴェスタ・V・ソード》に！」

彼の召喚した《シルヴェスタ・V・ソード》の能力により、青年の《マツコル》と《ティリオス》が吹き飛び、少年の手札がその分増える。

青年は苦渋の表情を浮かべた。しかし、少年の攻撃の手はまだまだ止まらない。

「さらに《斬込隊長マサト》召喚！マッシュM・Tで《ドスコイ・イチバンボシ》を手札に！」

M・Tにより《マサト》がスピードアタッカーを得、パワーが3000プラスされる。

「そして《ドスコイ・イチバンボシ》がバトルゾーンを離れたので、能力発動！俺の《シルヴェスタ・V・ソード》に与える！」

《ドスコイ・イチバンボシ》はバトルゾーンに出たときだけではなく、離れたときもその力を与えることが出来る。それにより、この

ターン少年のバトルゾーンには、ブロックされない怪物T・ブレイカーがいることになる。おもわずギャラリーの一人が、

「すごいコンボだ！」

と、叫んでしまったほどだ。

「《シルヴェスタ・V・ソード》でシールドに攻撃。^{アタック}トリプル
！」

青年のシールドが1枚1枚捲れていく。青年に、これを止める術はない。

周りのギャラリーが息を呑む。

「《マサト》でトド——」^{シールド}「S・トリガー発動」「——！」

青年が不敵な笑みを浮かべる。少年には分かっていた。この状況を吹き飛ばせる青年のデッキに入っているだろう^{シールド}S・トリガーの存在に。

「まずは《白騎士ゲート》を発動。手札から《白騎士の精霊アルドラ》をバトルゾーンに」

青年の手札から大型ブロッカーである《アルドラ》がバトルゾーンにでる。

しかし、これだけでは少年の動きは止められない。

青年は、もう1枚のシールドを表向きにした。ギャラリーのすべての視線がそのカードに注がれる。

「《白騎士・スパーク》発動。あなたのクリーチャーをすべてタッブします！」

少年のクリーチャーは、すべて動きを止めた。

青年は心の奥底で笑っていた。もしかしたら顔に出ているかもしれない。昔から、相手を騙すことは出来ても、自分の表情をコントロールするのは苦手だった。

誰も気付いてはいない。周りのギャラリーもジャッジも対戦相手である赤いYシャツの少年も。青年の仕掛けたイカサマに。

青年は自分のデッキの中のカードの順番をすべて把握していた。シールドの中のカードはもちろん次に引くカードさえも。

何故、青年はデッキの中のカードをすべて把握できたのだろうか？それは彼が一流カードマジシャンだったからだ。

彼は天才マジシャンだった。特にカードマジックの分野に関しては期待の新星と言われるほどだ。

しかし、カードマジックを練習していくにつれて彼はだんだんマジック自体に飽きてきた。

確かに彼には才能があつたが、所詮は見世物。貪欲な彼の性にはあつていないのは一目瞭然だった。

そんな時に彼はカードゲームと出会った。

トランプとは違いカードゲームのカードには1枚1枚違う役割がある。

その組み合わせにより無限大の力を発揮できる。彼はすぐにカードゲームに嵌った。

そして、彼は自分の力を最大限発揮できるカードゲーム——「デュエル・マスターズ」を手に取った。

大会では、基本的に相手がシャッフルしたデッキで決闘する。^{デュエル}
イカサマ防止のためだ。

しかし、青年はカードの配置をすべて覚えている。

少年がシャッフルした所さえ覚えれば、あとは順番を入れ替えれば良いだけ。

さらに青年はシールドを並べるときに特殊なテクニックで好きなカードをシールドと手札に入れることも出来た。

^{シールド}

S・トリガーによる逆転劇がウリの「デュエル・マスターズ」は、まさに彼にピッタリのカードゲームだったのだ。

「僕のターン。ドロ……」

引くカードは分かっている。《白騎士城ピラー・オブ・フェザー》

だ。

青年はチラリと横目でそのカードを見る。予想的中、《ピラー・オブ・フェザー》だった。

しかし、もうシールドはないためマナに埋める。これで8マナになった。

このタイミングを待っていた。相手がビートダウンで大量展開が得意なのは2、3ターン目で分かっていた。だったら、そのクリーチャーが一瞬で消えたらどんな表情をするのだろうか？

青年は卑劣な男だ。彼には「白騎士」は似合わない、本性を知っている人はそう言うはずだろう。

「進化、《アステイノス》を《白騎士の聖霊王H E V E N》に！」
少年のバトルゾーンのクリーチャーは、一瞬でシールドになった。

「ターンエンド。君のターンだ」

青年は笑みを浮かべながらターンを終了した。彼のバトルゾーンには《アルドラ》と《H E V E N》の2体。対して少年のバトルゾーンには何もない。形勢は逆転した。

たくさんある少年のシールドもこの2体の大型クリーチャーによってすべて吹き飛んでしまっただろう。

ギャラリーの全てが、少年が絶望の淵に立たされていると思った。

しかし、少年の目は逆に輝いている。

「お前、勝利を確信しているだろ？」

少年が静かに、淡々と話し始める。確かにまだ青年の勝利が決まっているわけではない。

「確かに切札である《H E V E N》と《アルドラ》が出せているし、俺のクリーチャーは0だからな」

《アルドラ》の「ブロッカー」という能力に守られているだけなのだ。

「でも物事には――」

それさえ崩せば、勝機はまだある。

「100%なんて存在しない！」

そう、彼の切札によって――。

「俺のターン！《爆竜GENJI・XX》ゲンジ召喚！」ダブルクロス

少年の最後の切札、《爆竜GENJI・XX》。攻撃時にブロッカーを破壊する能力を持つスピードアタッカーのW・ブレイカー。

「《GENJI・XX》で相手プレイヤーに攻撃。アタックトリガー攻撃能力で《アルドラ》を破壊！」

崩れ落ちる青年の防御。顔が青ざめていく。

「チェックメイト！トドメだ――。」

ダイレクトアタック少年の直接攻撃が決まる。勝負は決した。

周りのギャラリーが一気に沸く。このような大逆転は滅多に見られないのだ。

それを見たジャッジは、優勝商品のプロモカード少年に渡す。

「火渡 翔君。5月8日のDR優勝おめでとう！」

赤いYシャツの少年――火渡 翔。彼の物語が動き出す。

Level 1：『トランプ』（後書き）

初めまして！W - s w o r dと申します。

僕の趣味である「デュエル・マスターズ」を題材にした小説を書いてみました。

まだまだ小説家としては未熟なのでなにかと不自然な点はあるかと思いますが、どうか暖かい目で見守ってください。

また、小説内で変な言い回しや、使い方が間違っているところがあれば、どんどん指摘して下さい！よろしく願います。

Level 2：蒼空（前書き）

この小説は『デュエル・マスターズ』を題材にした小説です。

あくまでもフィクションです。

実在する地名、氏名年齢住所電番などとはまったく関係がありません。

なおカードの効果などはココ(<http://www27.atwiki.jp/duelmasters/>)で調べるといいと思います。

Level 2：蒼空

Next Levelへ輝ける切札

DRでは、大会が終わった後にその場所をフリーデュエルスペースとして開放している場合が多い。そこでは大人子供問わずトレードをしていたり、デュエルしていたり、談笑していたりする。

その中にはシャークトレード（価値が釣り合わない不正トレード）やカードを盗む輩が居ることもあるが、この『トランプ』ではそういうのは少ない。店長がしっかりしているからだ。

翔は、受け取った優勝商品のプロモカードを黒いエナメルバックに入れると、バーのカウンターにあるような椅子に座った。

普通は、カードショップにこういうような椅子は置いていない。では何故置いてあるのだろうか？

その理由は簡単、ここが「バー」でもあるからだ。

この『トランプ』では昼の営業を終えると、紳士淑女の集まるバーに早変わりする。だからここは「カードバー」とも呼ばれているらしい。

バーの向かい側では、フリースペースのデュエルを楽しそうに眺めている若い女性がグラスを磨いていた。

その若い女性は髪をロングにして垂らし前髪をピンで留めている。顔から見るに20代前半で、日本人的な美しさを醸し出している。

「・・・店長、お茶ください」

若い女性は点いていた薬缶の火を止め、棚から取り出したコップにティーパックを入れ注ぐ。彼女は、笑顔で翔の前のカウンターにコップを置いた。

「火渡君。優勝おめでとう」

どう考えても彼女が店長であるはずは無い。若すぎる。

この『トランプ』は「デュエル・マスターズ」が発売された頃ぐら

いに作られたものだ。

それを立証するように、壁にかけられている開店当初の『トランプ』の写真には2002とくつきり刻まれている。

彼女は20歳前半の容姿をしているので、そこから計算すると彼女は10代にこの店を開いたことになる。どう考えてもおかしい。

しかし、彼女はこの『トランプ』の店長なのは確かなのである。

彼女の年齢も出生も経歴も謎に包まれている。それは、翔にも、他の『トランプ』の常連も知らない。

以前、誰かの調べで、何かのカードゲームの世界一だったことが分かっていたが、それ以上のことは知らなかった。

しかし、誰も調べようとはしない。それは何故か？

簡単な理由だ。それがこの店の「禁忌」だからである。

翔は、静かにコップに手を取りそれをすすする。中身はどうやら紅茶のようだ。

「店長も気付いていたでしょう？あの決勝の青年のイカサマ」

「ええ、気付きましたよ。珍しいですね、あの手のイカサマは」

先程翔と決勝で戦った青年の姿はもう無い。2位に渡されるプロモカードも持っていかなかったらしい。

「すべてのカードの配置が分かる、好きなカードを手札とシールドに入れられる」。気付いたのがデュエルの始まった後だったの
でジャッジに言えなかったですが、まさかあんな手があったとは驚きです」

翔がもう一度紅茶をすすする。店長の入れる紅茶は人一倍おいしい。

それが、この店の魅力の一つでもあるだろう。

「あなたと私以外誰も気付かなかったのですから。あれがかなり鍛錬された技であるのは間違いなかったですね。彼はマジシャンか何かだったのでしょうか」

「で、店長はいつ気が付きましたか？」

翔が疑問を投げかける。彼女は、満面の笑みで答えた。

「もちろん、シャッフルしているときです」

フリーデュエルスペースは、D R程ではないが真剣なデュエルを楽しめる場所である。

どの大会形式でも優勝者は一人で、誰もが1回は負けているからだ。カジュアルデッキやファンデッキでも、必ず勝ちを目指す。

ほとんどのデュエリストにおいて、負けは普通悔しいものだ。

相手の素晴らしいデッキやプレイングに心を奪われることもあるが、それでも自分の自身のあるデッキを使って負けるのは悔しい。

そんなフリーデュエルを鑑賞するプレイヤーも少なくは無い。

『トランプ』の一角で行われているデュエルは、決勝戦ほどではないがギャラリーが集まっていた。

対戦しているのは、メガネをかけた少年と今日のD Rであるイカサマ師に準決勝で敗北した4位の青年。

メガネの少年は、灰色の地味なTシャツの上に青チエックのパーカーを着て、そのパーカーのチャックをそれなりに閉めている。背丈と顔から推測するにどうやら中学生のようだ。

対して、4位の青年は、緑の長袖Tシャツの上に少し黒めの灰色のVネックのトレーナーを着ている。こちらはどうやら高校生のようだ。

今は高校生のターン。シールドは5枚の無傷でバトルゾーンには、《マイキーのペンチ》とその効果でスピードアタッカーになった《時空の封殺ディアス^{ゼータ}》がそれぞれ1体ずつ鎮座している。どうやら「超次元ペンチビート」のようだ。

対して、メガネの中学生のシールドはバトルゾーンには《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》と、《時空の精圧ドラヴィタ》、前のターン《ヘブンス・ゲート》からバトルゾーンに出した《神令の精霊ウルテミス》と《知識の精霊ロードリエス》のエンジェル・コマンドを中心としたブロッカーが並んでいる。

盤面だけを見ると明らかに中学生の方が有利に見えるが、高校生の

手札には、それを覆せるカードが存在した。

「俺のターン。《クリムゾン・メガ・ドラグーン》召喚。ブロッカーを全て破壊！」

中学生のバトルゾーンの殆どのクリーチャーが吹き飛ぶ。残ったのは《ドラヴィタ》のみだ。

「《ディアスZ》でシールドに攻撃！殲滅返霊発動。墓地をそれぞれ4枚ずつ戻します。」

「……手札を二枚山札の一番下に置きます。」

中学生の4枚あった手札が2枚削られ半分になる。

「シールドをW・ブレイク！」

今度は中学生の手札が2枚増える。しかし、中学生は有利にならない。

「さらにスピードアタッカーとなった《クリムゾン・メガ・ドラグーン》でシールドに攻撃！最後のシールドをブレイク！」

中学生を守っていた最後の盾が削られる。絶体絶命——。

「S（シールド）・トリガー発動！《ヘブンス・ゲート》！手札から《魔光大帝ネロ・グリフィス》を2体バトルゾーンに！」

中学生の手札から大型ブロッカーが2体バトルゾーンに出された。

高校生が舌打ちする。

高校生の攻撃の手が止まる。しかし、まだ高校生が有利なことには変わない。

このターン中学生のバトルゾーンを離れたクリーチャーは3体。つまり——。

「ターンエンド。このターン君のバトルゾーンを離れたクリーチャーは3体なので《ディアスZ（ゼータ）》覚醒——《殲滅の覚醒者ディアボロスZ》！」

翔の飲んでいた紅茶はもうはじめにあった量の半分を切っている。もう湯気の立たなくなった紅茶を見ながら翔はため息をついた。

「ハア…………。やっぱりはじめから気付いていましたか」

「まあジャッジが気付かなかったのは驚きでしたがね。今度私からあのジャッジに指導しなければならいようです」

ジャッジをやっていた店員がギクリと跳ねこちらを見た。

店長は自分で磨いていたグラスにボトルを注ぎ、それを飲み干す。

「店長。それお酒」

「あ」

彼女の手元にあったボトルには、きつちりと「マティーニ」と刻まれている。

中学生は今、窮地に立たされていた。

彼のバトルゾーンにあるエンジェル・コマンド達は高校生の《ディアボロス^{ゼータ}》によって、ただの雑魚クリーチャーに変化してしまっている。

対して高校生のバトルゾーンにはその《ディアボロス^{ゼータ}》と先程中学生のブロッカーを吹き飛ばした《クリームゾン・メガ・ドラグリーン》、《マイキーのペンチ》の3体バトルゾーンにある。

中学生のシールドは0。つまり、この高校生の3体のクリーチャーを除去しない限り、中学生の敗北は決定する。

さらに《ディアボロス》は「解除」能力を持っているため、破壊されてもバトルゾーンに残る。つまり、計4回除去しなければならい。

中学生のデッキには《魔刻の斬将オルゼキア》が入っているようだったが、それでも足りない。その場しのぎにはなっても、結局ギリ貧になって負けてしまうだろう。

このターンが彼の運命の分岐点だ。

「僕のターン」

高校生はまだ気がついてはいない。ここからはじまる大逆転劇を。

「進化GV——」

彼の引き起こす大逆転劇を。

「《超神星ネプチューン・シュトローム》！」

周りのギャラリーがざわめく。気付いたのだ。この状況をひっくり返すことが出来る唯一の方法に。

「《ネプチューン・シュトローム》で《ディアボロスZ》^{ゼータ}に攻撃！メテオバーンを発動！あなたのバトルゾーンのクリーチャーをすべて手札に戻します！」

「！」

高校生のバトルゾーンから解除された《ディアスZ》^{ゼータ}以外のクリーチャーがすべて手札に戻る。さらに《ディアスZ》^{ゼータ}を対象にした攻撃はまだ終わっていないので、追撃をかけるように《ディアスZ》^{ゼータ}もバトルゾーンを離れ、超次元ゾーンに戻ってしまった。

「くっ、俺のターン！」

高校生が焦ったようにドロースる。

青年の手札には先程に戻された《マイキーのペンチ》と《クリムゾン・メガ・ドラゲーン》しかない。このドローのみがこの状況を打破できる唯一の鍵だ。

「……！《鎧亜の咆哮キリユー・ジルヴェス》召喚！」

高校生はデッキの中に入っている唯一のスピードアタッカーを召喚した。

中学生のシールドは0枚。ブロッカーも無い。

「《キリユー・ジルヴェス》でドドメ！」

周りのギャラリーが全員息を呑む。しかし、中学生の目はまだ諦めていない。

「Nストライク《威牙の幻ハンゾウ》！《キリユー・ジルヴェス》^{ニンジャ}を-6000！」

高校生には攻撃が通ったように見えた。しかし、その攻撃さえ一枚のクリーチャーによって阻まれてしまう。高校生は彼のデッキが究

極の防御型デッキだと改めて気付かされた。

「僕のターン。《魔光帝フェルナンド？世》をコスト軽減して召喚します！そして呪文《魔弾バレット・バイス》。手札を2枚捨ててください」

高校生の手札は2枚しかない。もちろん全て捨てられる。

もともとこの状況を逆転できるようなカードでは無かったが、手札アドバンテージをすべて奪われてしまった。これは痛い。

「《ネプチューン・シュトローム》でシールドをT・ブレイク！」

高校生のシールドが3枚も削られる。1枚1枚高校生は期待しながら捲っていったが、S・トリガーは無かったようだ。

「俺のターン……………」

引いたカードを見ても、先程ブレイクされたカードと同じように、この状況をひっくり返すことの出来るカードではなかった。尤も、彼のデッキにはこの状況をひっくり返せるようなカードは無いだろうが。

高校生は、完全に諦めた。

「僕のターン。《魔弾オープン・ブレイク》。4枚ドロします。

そして呪文を唱えたので《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》をG・

0で召喚——」

高校生の顔が引きつる。まだ防御を固めるつもりなのだろうか。

「《フェルナンド？世》でシールドをW・ブレイク！」

高校生は機械的にシールドを捲り、全て手札に加える。もう逆転することは出来ない。

「《ネプチューン・シュトローム》でトドメをさします！」

翔の飲んでいた紅茶はもう空になった。

翔は壁に掛けられている時計を見る。6時——。

多少日が伸びたとはいえ、もうすぐ帰らなければならぬ時間だ。もう店長はカウンターの向かい側にはいない。多分、夜のバーの準

備をしているのだろう。

そう思いながら自分のバックの中にデッキをしまっていると、ふいに後ろから声をかけられた。

「翔、そろそろ帰ろうか」

話しかけたのは先程のメガネの中学生のようだ。

「そうだな、優也」

店を出ようとするメガネの少年——蒼木 優也の後を追うように翔は席を立ち上がった。

日が暮れている。その光は自転車に乗って家に帰ろうとする二人を包み込む。

「火渡 翔と蒼木 優也。共に中学2年生か……。」

その光景を見ながら『トランプ』の2階のベランダから、店長——

鈴宮 麗奈はグラスにボトルを注ぎ、それを飲み干した。

「もしかしたら………ね………」

彼女はグラスを軽く揺らし、その中にわずかに入っていた液体が跳ねる。

「店長、それカクテルです」

「あ」

先程から正座で座っているジャッジが指摘した、彼女が飲んでいたボトルには、しっかりと「ベルモット」と刻まれていた。

Level 2：蒼空（後書き）

そんなわけで第2話です。早えー！執筆早えー！プロット追いつかねー！

この話では《超神星ネプチューン・シュトローム》を操る蒼木 優也君が登場しました。

彼のデッキはコントロール系なので執筆するのにとっても苦労しました。ビート脳エ・・・。

しかしどうしても使わせなかったのですよ。彼に《ネプチューン・シュトローム》を。

もう少し使われて良いと思うんだけどなあ。

Level 3：桜と少女「1」（前書き）

この小説は『デュエル・マスターズ』を題材にした小説です。

あくまでもフィクションです。

実在する地名、氏名年齢住所電番などとはまったく関係がありません。

なおカードの効果などはココ(<http://www27.atwiki.jp/duelmasters/>)で調べるといいと思います。

Level 3：桜と少女「1」

桜の花が咲いていた。

少し古めかしい公園に一本だけそびえ立つその桜の木は、まるでその景観を見守っているようだ。

周りに団地などなくいつもひっそりとしているこの公園には珍しく、その日には二つの声が響いていた。

その声は、競い争うようにも聞こえ――。

「《未来設計図》で6枚から《レクタ・アイニー》を手札に！」

「《幻緑の双月》で手札を1枚マナブースト！」

Next Levelへ輝ける切札へ

夕日が教室に差し込んでいた。

その開け放たれた窓からは春の香りが漂い、教室全体を癒している。外では野球部がバッティング練習をしているようだ。ホームランの音が鳴り響く。

そんな教室の中で翔は一人掃除をしていた。

別に罰ゲームとかの類ではない。たまたま今週教室の担当だった翔の班のクラスが彼以外全員休みで、たまたま担任の先生が急用で居なくなったからだ。かなり奇跡的だが。

一人で机を運び、黒板を拭き、床を掃く。

彼がクラスで“クール&ヒート”と呼ばれる所以の一つがココにあるのだろう。

熱い志を持っているが、マンガの主人公のように一直線ではなく、何事にも冷静に対処する。かと言って周りに対して冷たいというわけではない。

まさに“クール&ヒート”ということだ。

最後の机を運び終わると、翔は自分の机に座り込み一息入れた。

翔はこういう時間が嫌いではない。

朝と同じようにキチンと整列されたきれいな教室だ。他の人間ではこうはいかない。

翔がボーツと窓から見える夕日を眺めていると、後ろからドアの開く音が聞こえた。

振り向くと、制服姿の少女がラケットケースを背負い息せき切っている。

桐谷 飛鳥。バトミントン部のエースで、このクラスにいる第2学年の副学級委員長。成績優秀で、この前部活を都大会へ導いたらしい。黒髪のセミロングで、この学年ではそこそこの人気がある。

彼女の性格はその服装にも表れており、しっかりと第一ボタンまで閉められている。

第一ボタンまで閉めている生徒は指を折るほどしか居ない。翔もその一人だ。

「お疲れ様。もう終わったの？」

飛鳥が呼吸を整えながら翔に近づく。

「ああ、ただの掃除だったからな。簡単だったし」

翔が淡白に答える。時計はもう5:00を指していた。

今日、彼は部活があった。硬式テニス部だ。しかし、もうすでに出るのを諦めている。

「明日って部活があるの？」

「いや、明日は無いけど。それがどうかした？」

明日は土曜日、つまり『トランプ』でのDR開催日だ。同じテニスコートを使う軟式テニス部にいるデュエリストはそれに参加出来ず、わざわざ町のはずれにあるカードショップに遠征しているという話を彼は聞いたことがあった。

「じゃあさ——」

「？」

「明日、私とデュエマしてくんない？」

彼女の話 요약するとこうだ。

義兄に勧められて去年の冬からデュエマを始めたそう。

成績優秀な彼女はすぐにデュエマに嵌っていったが、幼い弟しか対戦相手がいない困っていた。

周りにやっている女子などおらず、男子にはデュエマをやっている人もいたが、普通はカードゲームをやっている女子は偏見を持たれるため敬遠していた。

しかし、夏休み前に義兄が一度帰ってくる。しかもその時デュエマをする約束をしていたのだ。

今彼女が使っているカードはその義兄が残したカードである。そのデュエルで勝たない限りそのカードは彼女のものにはならない。

いわゆる「賭けデュエル」だ。（注：賭けデュエルを他人とやるのはトラブルの元です！ぜったいにマネしないように！）

だから、今回彼女はありったけの勇気を振り絞り、翔にデュエルを挑んだようだ。

翔は、中1の頃から周りからデュエマプレイヤーであることを知られている。

自己紹介の時にはつきりと「好きなことはデュエル・マスターズです」と言っていたからだ。

さらに翔は彼女の仕事を何度か手伝ったことがある。

彼女の周りで一番面識があり、尚且つデュエリストだったのは翔だったのだ。

「……………」

「やっぱ変かな？女の子のデュエリストって？」

彼女が少し俯く。その彼女の横顔に夕日の光があたり影を作りより際立たせて見えた。

「いいや、変なわけないだろ？」

「え？」

「人にはそれぞれ好きなものがある。それを否定しても何も生まれ

ない。ただ相手を傷つけるだけだ。そうだろう？」

「うん……。」

「いいぜ、明日。どこでデュエルする？」

「ホントにいいの？」

「ああ、別に断る理由なんて無いし。で、どこでやるの？」

彼女がデュエルをする場所を選んだのは町の外れにある小さな公園だった。

この公園には殆どなにもない。古く成長した桜の木と、誰が置いたのかも分からない木製のテーブルと二対のベンチ。

確かにココならあまり人は来ない。

翔は桜の木の下で腕時計を見る。針は1時50分を指していた。遠くでベルの音が聞こえる。翔がパツとそちらを振り返った。

「ごめん！少し遅れたかな？」

飛鳥が自転車に跨りながらこちらに近づく。

その飛鳥の服は彼女を表すような色で彩られており、ピンクのYシヤツの上に白のカーディガンを羽織、少し短めの水色のスカートを履いている。

飛鳥は自転車を桜の木の下に止め、スタンドを下ろす。桜と飛鳥、絶妙にマッチしていた。

「いいや、俺が早すぎただけだ。別に遅れてないぜ」

翔がベンチに腰を掛ける。その手にはもう既にデッキが握られていた。

「そう。じゃ——」

飛鳥も同じようにベンチに腰掛ける。

「決闘スタート！」

「《青銅の鎧》召喚。マナブーストしてターンエンド！」

飛鳥のバトルゾーンには先程召喚された《青銅の鎧》が1体だけある。前のターンで唱えた呪文《未来設計図》で手札に加えたカード《レクタ・アイニー》を見るに、どうやらドラゴン系のデッキのようだ。

「《アラゴト・ムスビ》召喚！^{マーシャ嬢ッチ}M・Tで《幻緑の双月》を手札に加え、マナブースト！」

対して翔は先程召喚した《幻緑の双月》を^{マーシャ嬢ッチ}M・Tで手札に戻した《アラゴト・ムスビ》1体のみ。2ターン目と変わらず、翔のバトルゾーンにはクリーチャーが1体だけである。

しかし、問題は無い。彼のデッキはこの《アラゴト・ムスビ》のみで動くことが出来るからである。

翔のデッキはいわゆる「シルヴェスタビート」というものである。^{カンフーマジック}強力なK&Mソウルの進化クリーチャーである《爆裂大河シルヴェスタ・V・ソード》の全体火力&大量ドロを機軸とし、攻撃性能の^{カンフーマジック}高いK&Mソウルのクリーチャーでビートダウンし、そのまま勝利をもぎ取るデッキである。

次ターンでマナをチャージすれば6マナだ。バトルゾーンには《シルヴェスタ・V・ソード》の進化元になれる《アラゴト・ムスビ》もいる。

つまり、次のターンで飛鳥の《青銅の鎧》を蹴散らしながら翔は《シルヴェスタ・V・ソード》で殴ることが出来るだろう。

「私のターン。ドロ！」

山札を勢いよく飛鳥がドロする。マナゾーンのカード等を見て、このターン中に《アラゴト・ムスビ》を除去しなければ危険と気付いたのだろう。

引いたカードを見て、飛鳥の緊張していた頬が少し緩んだように翔には見えた。

「《超次元ボルシャック・ホール》！《アラゴト・ムスビ》を破壊し、《時空の嵐ストームXX》^{ダブルクロス}をバトルゾーンに！」

《アラゴト・ムスビ》が破壊され、かわりに《時空の嵐ストームX

《X》が超次元ゾーンからバトルゾーンに出る。

これで翔のバトルゾーンは0。対して飛鳥には《ストームXX》と《青銅の鎧》がある。

しかし、翔は物怖じしない。デュエマでは、バトルゾーンが空になることはよくあることだ。

そこから逆転できるのがデュエル・マスターズ——いや、全てのカードゲームに共通に魅力である。

「俺のターン。《鳴動するギガ・ホーン》を召喚！」

《アラゴト・ムスビ》を失った翔は、《ギガ・ホーン》のサーチ能力によりその穴を埋めようとした。

翔は山札を一通り確認した後、飛鳥のバトルゾーン、マナゾーンを凝視する。そして山札から一枚を抜き出した。

「《爆竜GENJI・XX》ダブルクロスを手札に加えるぜ」

《爆竜GENJI・XX》。《シルヴェスタ・V・ソード》と並ぶ

翔の切札。カンフイ

K・ソウルの高スペックドラゴンで、今まで何度も翔のピンチを救ってきた彼の相棒でもある。

「……確かに《GENJI・XX》は強いカードだけど……。火渡

君、プレイミスね」

「え？」

「この《ストームXX》を破壊しなかったのはプレイミスだと思うよ」

単純に考えて別に今《ストームXX》を除去する必要は無い。彼女の墓地には今《未来設計図》しかないので覚醒条件を満たす可能性は無い。《ストームXX》自身の墓地肥やし能力があるにしろ、最速で覚醒するのは2ターン後である。だから別に今は脅威ではない。

「私のターン。まず《ストームXX》で山札から3枚墓地に送るわ。グラヴィティ

そしてG・0、《レクタ・アイニー》を召喚！」

翔にはその《レクタ・アイニー》に見覚えがあった。確か、2ターン目に手札に加えたはずだ。

しかし、今のままでは攻撃出来ない竜ドラゴンと非力な火鳥ファイアー・バードがそれぞれ1体ずつ居るだけだ。

そう、竜と火鳥——。

「ボルトックス進化V!《ストームXX》と《レクタ・アイニー》を《龍炎凰工ターナル・フェニックス》に!」

このデュエルの運命をつかさどる紅蓮の不死鳥が舞い降りた。

Level 13：桜と少女「1」（後書き）

学校で地震が起きてビックリしました！W - s w o r dです。
あんなに揺れてたのにすごく冷静だったです。何故だろう？
避難訓練が役に立つ日も来るんだな、と思いました。

被災した人達に早く安心できる日が来ることを願ってます。
次回は後編です。楽しみにー。

Level 4：桜と少女「2」（前書き）

この小説は『デュエル・マスターズ』を題材にした小説です。

あくまでもフィクションです。

実在する地名、氏名年齢住所電番などとはまったく関係がありません。

なおカードの効果などはココ(<http://www27.atwiki.jp/duelmasters/>)で調べるといいと思います。

Level 14：桜と少女「2」

桜の花びらが舞い落ちた。その姿は、今の翔を映し出しているよう
で――。

Next Levelへ輝ける切札

「《龍炎鳳エターナル・フェニックス》で《ギガ・ホーン》に攻撃
！」
アタック

翔が舌打ちする。先程とは違い、この状況での0体はピンチだ。

《龍炎鳳エターナル・フェニックス》は自分のドラゴンとフェニッ
クスに「アンタップされているクリーチャーを攻撃できる」を与え
る能力を持っている。それは自身にも適用されるので、少なくとも
この《エターナル・フェニックス》を何らかの方法で除去しなければ、
翔のバトルゾーンは永遠に空のままとなってしまう。

しかも、彼のデッキには《エターナル・フェニックス》のパワーを
超えるクリーチャーは入っていないかった。つまり、バトルでは破壊
できない。

そして彼のデッキに入っている除去系のカードは《アクア・サーフ
アー》しか入っていないため、例えばバウンスしたとしてもまた進化
Vされてしまう。
ボルデッ

つまり、今翔は、圧倒的なピンチに立たされているということだ。

「俺のターン！」

翔が勢いよくカードを引く。そのカードをチラリと見るが、また直
ぐに元に戻した。

どうやらこの状況で逆転できるカードでは無かったようだ。

「《幻緑の双月》を召喚！手札を1枚マナブースト！さらに《隻眼
の粉碎脚ポン吉》！M・Tで《幻緑の双月》を戻し、《青銅の鎧》
を破壊！」
マインシャポッチ

とりあえず、飛鳥の頭数を減らしたものの、痛くも痒くもなっていない。まるで意味を成さない。

「私のターン。《武装竜鬼ジオゴクトラ》召喚。そして《エターナル・フェニックス》で《ポン吉》に攻撃！」アタック

《ジオゴクトラ》によってさらにパワーが上がる《エターナル・フェニックス》。ココまで来ると翔にとって「オーバーキル」だ。

「くっ……」

《ポン吉》が破壊されてまた0体に戻る。このまま行けば、確実に翔は負けてしまうだろう。

「《アクア・サーファー》召喚。《エターナル・フェニックス》をバウンス！《斬込隊長マサト》を召喚し、マッシュアップM・T！《アクア・サーファー》を手札に戻し、スピードアタッカーに！」

飛鳥の手札に《エターナル・ファニックス》がバウンスされる。どうせまたすぐに出せるが。

しかし、そのバウンスをした《アクア・サーファー》自身も手札に戻っているので効果が無いわけではない。今は《ジオゴクトラ》がいるから良いものの、次にもう一回手札に戻されてしまったら、もう場に進化元はいない。つまりすぐに進化は出来ない。

翔の手札は何枚もある。マッシュアップM・Tで何枚も稼いでいたからだ。その僅か一ターンで翔は大量展開することが出来るだろう。

「《マサト》でシールドをブレイク！」

死亡が確定している《マサト》が飛鳥のシールドをブレイクする。

そのシールドは^{シールド}S・トリガーでは無かったようだ。

「私のターン。^{グラヴィティ}G・0で《レクタ・アイニー》を召喚し、再び進化^{ボルテッ}V！《エターナル・フェニックス》！」

再び召喚される不死鳥。

「《エターナル・フェニックス》で、《マサト》を攻撃！」

また翔の場が0になった。しかし、先程よりはまだマシな状況とい

えるだろう。

しかし、飛鳥にはまだ余裕があった。彼女はまだ切札を隠しているからだ。

どんなに大量展開されても、一撃でそれを吹き飛ばす――。

彼女の切札は、彼女のまだ見ぬ世界の中で静かに息を潜めていた。

飛鳥は驚愕していた。翔が《アクア・サーファー》をマナゾーンに置いたからだ。

この局面での大量展開に必要な条件の一つに《エターナル・フェニックス》の一時的な除去だ。^{バウンス}

しかし、彼のデッキでそれが行える唯一のカードであろう《アクア・サーファー》をマナにしてしまった彼にはそれを行うことが出来ない。

彼の手札にもう一枚《アクア・サーファー》があるからなのだろうか？しかし、それでもマナに《アクア・サーファー》を置く必要は無い。不自然である。

この展開――《エターナル・フェニックス》が鎮座しているこの盤面を考えると除去札は一枚でも多くもっていたほうがいいはずだ。では何故、《アクア・サーファー》をマナにしたのだろうか？それは次の彼の行動で分かった。

「《アクア・ジエスタールーペ》を召喚！連鎖成功！《アクア・ドッペル》をバトルゾーンへ！《アクア・ジエスタールーペ》の効果で1枚ドロ―！さらに《大冒犬ヤツタルワン》を召喚！」

連鎖――。コストを使わずにクリーチャーを展開する能力の一つだ。

山札の一番上を表向きにし、それが自身よりコストが小さいクリーチャーならばコストを支払わずにバトルゾーンに出せる。M・ソウル^{マジック}の能力だ。

飛鳥は忘れていた。「シルヴェスタビート」の利点を。それは“M・^{マジック}

ソウルとK・ソウルの両方の性質を持っていること”。バトルゾーンのコントロールが得意なK・ソウルと展開力を誇るM・ソウル。それらが合わさった時の爆発力は凄まじい。だから「シルヴェスタビート」は強力なデッキタイプなのだ。

「……くつ。私のターン！」

彼女がこの状況を打開するには唯一つ、“切札”を引く必要がある。しかし、引けたのはまったく違うカードだった。

「《武装竜鬼ジオゴクトラ》召喚！《エターナル・フェニックス》で《アクア・ドッペル》に攻撃！」

翔のクリーチャーの数は減った。しかし、2体——《アクア・ジェスタールーペ》《大冒犬ヤツタルワン》が残ってしまった。彼の逆転が始まる。

「《ドスコイ・イチバンボシ》召喚！その能力で《アクア・ジェスタールーペ》を強化！」

翔が動いた。《アクア・ジェスタールーペ》が強化され、一度に2枚シールドをブレイク出来るようになる。

「さらに《斬込隊長マサト》召喚！M・Tで《ドスコイ・イチバンボシ》を手札に戻し、スピードアタッカーに！そして《ドスコイ・イチバンボシ》の能力発動！さらに《アクア・ジェスタールーペ》を強化！2体目のクリーチャーなので1枚ドロー！」

《アクア・ジェスタールーペ》がさらに強化され今度は3枚ブレイク出来るようになった。

「余ったマナで《幻緑の双月》も召喚！」

さらに頭数も増える。

「《アクア・ジェスタールーペ》でシールドをブレイク！」

飛鳥のシールドが3枚奪われる。残りのシールドはたったの1枚で、翔の攻撃出来るクリーチャーは2体。このままだと直接攻撃が通ってしまう。

1枚1枚を捲っていく飛鳥——。一枚目……二枚目……三枚目……

「！」

飛鳥の表情が変わった。彼女はシールドだったカードを表向きにし、その名を叫ぶ。

「シールドS・トリガー！《ナチュラル・トラップ》！《マサト》をマナゾーンへ！」

何とかこの場は凌げた。飛鳥は安心する。そして彼女は自分の手札を見て微笑んだ。そう、先程のシールドから“切札”が手札に入っただのだ。

「……………」

翔の動きが少し停止する。考えているのだ。《ヤッタルワン》で殴るか殴らないかを。

殴って最後のシールドを削ったとしても、このターンで決められるわけでは無い。

翔の最終的な結論は、

「ターンエンド」

だった。

デュエマの魅力は何といっても切札を決めた時の爽快感だ。一度決めると病み付きになる。

彼女は、今日、初めてその切札を使う。今まで数少ない決闘デュエマの中でこの切札を決めたことは一度も無い。

「私のターン。《ボルシャック・NEX》を召喚。山札から《ルピア・ラピア》をリクルート。

そして——」

今、彼女はその未体験の世界へ踏み込もうとしている。

「呪文！《無限掌》——対象は《エターナル・フェニックス》！」

《無限掌》——クリーチャー1体に「バトルに勝ったらアンタツプ」を与える呪文。光の全体タツプ呪文や火のアンタツプキラーと呼ばれるクリーチャーとよく組み合わせられる呪文だ。その中でも《エターナル・フェニックス》は最上級のアンタツプキラー。この不^{フェ}死鳥と並ぶアンタツプキラーは滅多に居ない。

「《エターナル・フェニックス》で攻撃！攻撃！攻撃！！」
翔のバトルゾーンが壊滅する。

「さらに《エターナル・フェニックス》でW・ブレイク！」
5枚あったシールドが削られていく。どちらも、S・トリガー^{シールド}では無いようだ。

「ターンエンド」

今の飛鳥には幾分か余裕があった。
バトルゾーンには《エターナル・フェニックス》と《ボルシャック・NEX》《武装竜鬼ジオゴクトラ》《ルピア・ラピア》の4体。対して翔は0体。

シールドも4枚削られ1枚になりかなり厳しいところではあるが、何とか持ちこたえられそうだ。相手の残りシールドは3枚。トリガーが無ければ次のターンで決められる。

つまり、翔にとって、次のターンがまさにラストターンなのである。

舞い落ちた桜の花びらが舞い上がる。それらは渦を巻き、周りの景色を彩っていた——。

「俺のターン！」

翔が高らかに宣言する。彼のこのデュエル最後のターンが始まった。飛鳥は彼の表情に多少変化があることに気付いた。まだ、何か策を隠している……………。

手札を握り締め、飛鳥は身構えた。

「《カスケード・ガイド》召喚！山札の上から3枚を見て元に戻す！」

ゆっくり、1枚ずつ確認していく。何か仕掛けたようだ。

「そして《母なる紋章》！《カスケード・ガイド》をマナゾーンに戻し——」

これで彼のマナは8マナになった。8マナ——。
飛鳥は気付いた。水のM・ソウルマジックの8マナの連鎖持ちクリーチャーの存在に。

「《サイバー・G・ホーガン》をバトルゾーンに！」

彼のデッキの中でも最もマナの高い彼の最終兵器リールウェポン。それがこの《サイバー・G・ホーガン》だった。

「能力発動！激流連鎖！山札の上から2枚見て、コイツよりコストの低いクリーチャーをバトルゾーンに出す！」

翔が、山札の上から2枚を表向きにする。そのカードは——。

「《爆裂大河シルヴェスタ・V・ソード》と《爆竜GENJI・Xクロス》！どちらもバトルゾーンに！」

《サイバー・G・ホーガン》の上に《シルヴェスタ・V・ソード》が重ねられ、さらに《GENJI・XX》がバトルゾーンに出される。どちらも召喚酔いはしない。

「《シルヴェスタ・V・ソード》でシールドをW・ブレイク！」

飛鳥の最後のシールドが削られていく。

（来い、S・トリガー………）

もしこのシールドがS・トリガーならば、彼女の勝利は決まる。

ゆっくりと飛鳥がそのシールドを捲っていく——。

「……………」

飛鳥の肩が落ち、ため息をつく。

「Checkmate！《GENJI・XX》でトドメだ！」

「あー、負けちゃった………」

飛鳥がベンチに座り込む。いつの間にか立ち上がっていたようだ。

「流石だね、火渡君。とっても強かったよ」

「いいや、俺なんてまだまだ。それよりも始めたばかりなんだろう？ 桐谷さん、すごかったよ。まさかあのタイミングで《無限掌》が来るとは思わなかった」

翔が空を見上げた。太陽はまだ揚々と彼らを照らし続けている。

「じゃ、もう一回デュエマしない？」

彼女はデッキを前に突き出した。しかし、翔は自分のデッキを鞆にしまう。

「……どうしたの？」

翔は自分の腕時計を見る。2時半――。

「今から、『トランプ』に行かねえか？」

「……………」

長い沈黙が流れる。

「いや、無理でしょ、変な目で見られるだろうし」

ようやく飛鳥が声を絞り出せた。

「そんなことない。皆仲いいし、絶対桐谷さんも仲間になれる」

「えっ、えっ…無理だよ」

「大丈夫。行こうよ、そっちの方が絶対桐谷さんのためにもなる。

いけばいつでもデュエマできるし」

「え……でも……………」

「だから、やる前から無理って言っても何も始まらないだろ！ 大事なのは一歩踏み出すことじゃないのか？」

翔が声を荒げる。彼女のためだ。人は、いつも始めの一歩が踏み出せない。恐れているからだ。その一歩を踏み出さなければ、見えない景色があるというのに。

「……………」

大事なのは「踏み出すこと」。彼はそう思っている。

「……………」

「……………」

「うん……。わかった、行くよ、私も。『トランプ』に」

飛鳥は翔の思いを感じ、受け止めた。彼女は今、「一步」を踏み出そうとしている。

「本当か！？ホントに？」

「うん！私、翔君を信じるよ！」

二つの自転車が景色を、人を、風を切って走っていく。

（確かに、私、一步踏み出してなかった……）

先頭を走るのは翔、その後ろが飛鳥だ。翔の赤と青の車体から見える背中を追い飛鳥はペダルをこいでいる。

（踏み出さなきゃ、始まらない。当たり前のことだったのに……）
「ついたよ」

「！」

ココがトランプ——彼女の一步を踏み出す場所。

翔が手馴れた作業で自転車を置く。彼女はその横にとりあえず止めておいた。

飛鳥が息を呑む。翔が、扉を開けた——。

「……………」

周りが急に静かになったのを感じた。皆の視線がこちらに集まっているのを感じる。

飛鳥は翔の後ろでただ固まっているしかなかった。

ああ、翔君を信じたのが間違いだった——。と、飛鳥は思った。

「あれ？翔、来ていたんだ。え、後ろの女の子、桐谷さんじゃない？」

飛鳥の目に青いチェックのパーカー姿が映る——同じクラスの蒼木 優也だ。

「もしかして、桐谷さんってデュエマやってるの？」

彼女の顔が赤面していく。優也が今何を考えているのか飛鳥には分かる。

どうせ（え……、女子がカードゲーム……）だろう。
しかし、彼の放った一言は彼女の予想を大きく反したものだっ
た。
「じゃ、デュエマしない？」

（え……………？）

一瞬の沈黙が流れる。

「あゝ、桐谷さん。どんなデッキ使ったろ。楽しみだなあ」
一人喜んでいる優也。横を見ると、翔は微笑んでいた。

「あれ？女の子？珍しいなあ」

店の奥から女の人が見れる。一体誰なのだろう？

「あ、店長。こんにちは」

翔が軽く挨拶する。

で、店長！？と、飛鳥は思った。

ここはカードショップだ。もし仮にこの女の人が本当に店長ならば、
この人もデュエマしていることになる。つまり、飛鳥以外にデュエ
マをやっている女子がいるということだ。

飛鳥は翔を見る。彼は「言っただろ？」と笑いながら言った。

ここから、私は始められる。と、彼女は思った。彼女はココから一
歩を踏み出す。

「じゃ、デュエマしようか」

彼女は笑いながらデッキの準備をする。

桜の舞い散る中、彼女は新しい道への一步を踏み出した。

Level 4：桜と少女「2」（後書き）

というわけで、初の前後編は完結しました！

今回のお話ではデュエマ小説の物語のタブーである、「ヒロイン」女子がデュエマをやっている」に挑んでみました。

書くのが辛かったです。もっと女子のデュエリストが居てくれれば良いのに……。

友人からのアドバイスで、今回から登場したデッキを公開してみようと思います。

『Eternal』

■クリーチャー

- 3 / 火《龍炎凰エターナル・フェニックス》
- 4 / 火《ボルシャック・NEX》
- 3 / 火・自然《武装竜鬼ジオゴクトラ》
- 3 / 火・自然《ルピア・ラピア》
- 3 / 自然《青銅の鎧》
- 4 / 《コッコ・ルピア》
- 4 / 自然《レクタ・アイニー》

■呪文

- 3 / 火《超次元ボルシャック・ホール》
- 4 / 《未来設計図》
- 1 / 自然《母なる紋章》
- 2 / 火《無限掌》
- 3 / 火《地獄スクラッパー》
- 4 / 自然《ナチュラル・トラップ》

■超次元ゾーン

2 《時空の嵐ストームXX/神風の覚醒者ストームカイザーXX》
他

《シヨープ・アイニー》も入るかもしれませんが。一応、4話時点でのデッキなので。

コレであったプロットの分を使い切ったので更新は少し先になると思います。

それではまた次回ー。

Level 5・0：それぞれの祝日 序章（前書き）

この小説は『デュエル・マスターズ』を題材にした小説です。

あくまでもフィクションです。

実在する地名、氏名年齢住所電番などとはまったく関係がありません。

Level 5 - 0 : それぞれの祝日 序章

6月。それは学生にとって憂鬱な月。

全国の学生はこの月になると、溜息をつき落胆する。

他の月と違い、この月にだけ無いものがあるからである。それは何か？

答えは祝日である。

1月は元旦や成人の日。2月は建国記念日。3月は春分の日、4月は昭和の日、5月は憲法記念日を始めとするゴールデンウィーク、7月は海の日、8月には祝日自体は無いが、多くの場合は夏休み中なので関係ない。9月は敬老の日、春分の日、10月は体育の日、11月は文化の日、勤労感謝の日、12月は天皇誕生日と言った具合に、6月を除く全ての月に祝日（休み）が存在している。だから学生は6月になると肩を落とすのだ。しかし、彼らには関係の無いことのようにだ。

Next Level 1 輝ける切り札

教室には光が差し込んでいた。それは中にいる生徒を暖かく包み込んでいる。

明日は彼らだけの祝日だ。いわゆる“創立記念日”というやつだ。

憂鬱になりがちな6月に創立してくれるなんて、まったくこの学校の創設者には感謝しなければならぬ。

飛鳥は、クラスの女子の一人と何か話していた。どうやら、明日は彼女と遊ぶようだ。

彼女——黒埼 楓は生徒会役員である。飛鳥も人気がある女子の一人だが、彼女はそれ以上の人気がある。

日本人形のような黒く長い髪に細い手と足。それにルックスも良ければ、誰でもすれ違えば二度見してしまうのは間違いないだろう。

しかも彼女は優等生で誰にでも優しい。

まさに、生徒会役員にふさわしい人物である。

どうやら飛鳥と楓は小さい頃からの幼馴染のようだ。しかし、彼女達の会話を聞いていると、薄くだけ楓の“裏”の性格が出ているような気がする。

優也は読書をしていた。数学の参考書だ。彼は以前「数学的な思考がデュエマにも生かされるんだよ！」と翔に話していた。

しかし、彼の数学の成績はいつまでたっても伸びない。いつも“3”だ。努力は必ず報われるわけではないことを指し示す良い例だろう。

彼が明日どうするのか、まったく翔は知らない。と言うよりも知らなくていい。

たいていの場合、彼は『トランプ』にいる。特に理由も無くただいるのだ。

その理由を彼に聞くと、「うーん、……………デュエマが好きだから？」と答えた。わけが分からない。

翔は暖かな光景を静かに眺めていた。その表情には少し柔らかさが見える。

彼は明日、一日中『トランプ』に居るつもりだ。専ら店長か優也とデュエマしていることになるだろう。

ちなみに、彼は店長にほとんど勝てたことがない。別にそれは彼が弱いわけではない（それは今までの活躍を見れば簡単に分かるだろう）。

店長が強すぎるのである。全国大会レベルのデュエリストで互角の戦いが出来るほどだ。

もし現役のプレイヤーだったなら、かなり上位であっただろう。教室のドアが勢いよく開き、担任が姿を現す。

「おい、学活始めるぞー。学級委員号令宜しくー」

「起立!」こうして、祝日の前日は幕を下ろした。

Level 5 - 0 : それぞれの祝日 序章（後書き）

お久しぶりです！W - s w o r dです。

約一ヶ月ぶりの投稿ですが、今回の文字数はかなり少ないものになっています。

タイトルの「5 - 0」からも分かるように分岐する話の序章になっています。

本当は一括してまとめる予定だったのですが、話の内容が濃すぎて纏めきれなくなりましてね（笑）

今作品を楽しみにしている方には申し訳ないのですが、もうしばらくお待ちくださいね。

重大なミスが発覚し修正しました。楽しみにして読んで下さる皆様方、大変申し訳ございませんでした。

Level 5 - 1 : 彼女達の休日 (前書き)

この小説は『デュエル・マスターズ』を題材にした小説です。

あくまでもフィクションです。

実在する地名、氏名年齢住所電話番号などはまったく関係がありません。

なおカードの効果などはココ(<http://www27.atwiki.jp/duelmasters/>)で調べるといいと思います。

致命的なミスが発覚しました。詳しくは前回の後書きをご覧ください。

Level 5 - 1 : 彼女達の休日

初夏の眩い昼の光が、薄いピンク色のカーテンによって遮られつつもその部屋に伝わってくる。

その光が照らした勉強机の棚には、きつちりと教科書やファイルが配置されており、その部屋の主の几帳面さが表れているようだ。

壁には某有名男性アイドルのポスターが貼られており、木製のベッドの上にはぬいぐるみがいくつか置いてある。時計も枕も全て何もかも薄いピンクや水色、白などの普段からその部屋の主が好んでいる色で統一されている。極普通の女子の部屋だ。

ただ一つ、ただ一つ違うところは、その勉強机の引き出しの中にデュエル・マスターズのカードがあるということだけだった。

Next Level へ輝ける切札へ

その部屋の主——飛鳥は家のダイニングで麦茶をコップに注いでいた。

その数は2つ。今日は彼女の親友の黒埼 楓が遊びに来ている。コップを両手に持ち、階段を上って部屋のドアを開く。そこには濃い紫のフリルのワンピースを着た楓が座り込んでいた。ワンピースの裾からは黒のレギンスが見えている。

「お疲れ様へ」

楓の手元にはトランプのカードが置かれている。『スピード』と呼ばれるゲームだ。置かれたカードを見る限り、どうやら飛鳥が負けたようだ。

「もう、ホント楓、速過ぎるよー」

飛鳥が片方のコップを楓に手渡す。お茶を持ってくるか持ってこないか、賭け^{アンディ}ルールでゲームをしていたらしい。

「まあ、伊達に生徒会やってないからねー」

と、楓は悪魔のような笑みを浮かべて答えた。その話し方一つ一つが普通の彼女からはまったくと言っていいほど想像出来ない。彼女はプライベートでは“何に対しても容赦が無い”のだ。言いたいことは必ずはっきり言う。やりたい事は必ず成し遂げる。好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。

そして隠れた情報通でもある。この学校であつたことで彼女の知らぬものは無い。その面は特に生徒会で重宝されているらしい。

学校ではそれをうまく隠しているが、プライベートではそれを曝け出している。特に、親友である飛鳥に対しては。

手元のトランプを器用に片付け、ケースにしまう飛鳥。ピンクのラフなTシャツに白のパーカーを着ている今の彼女と楓はまるで対照的だ。

「で、本題なんだけどさ——」

飲み干され、氷だけとなったコップを手につく楓。その目は机の“引き出し”を見つめていた。

「私にデュエル・マスターズを教えてくれない？」

「……………へ？」

呆然としている飛鳥。当然だ、飛鳥は自分がデュエマをやっている事を自分の兄、そして翔と優也にしか明かしていなかったのだからまさか、翔か優也が誰かにバラしてしまったのだろうか——。と彼女が頭を混乱させている内に、静かな笑みを浮かべていた楓が口を開いた。

「飛鳥、火渡君と蒼木君は何もバラしていないわ。落ち着いて」

「えっ、じゃあどうやって……？」

前述したとおり、飛鳥は自分の秘密をその3人にしか明かしていない。デュエマを出来る場所である『トランプ』に行く時は念入りに注意をしているから、その方面でバレることは無いだろう。

「最近のあなたの行動を見ればすぐ分かるわよ。最近ずっと火渡君や蒼木君と話してたし。その二人に共通する事は唯一つ、TCG」

デュエル・マスターズ』。一年の時に彼らがそのカードゲームのプレイヤーであるってこと聞いた事があったし」

飛鳥の開いた口はまさに“塞がらなかった”。流石情報通といったところだ。

「……………楓、下手したら探偵になれるんじゃない？その推理力」

しかし情報をただ手に入れているだけでは、ここまでは出来ない。

彼女はそれに加えて、小説の中の名探偵に匹敵できそうなほどの推理が出来るから、生徒会でも重宝されているのだ。

「で？なんでデュエマ教えて欲しいの？」

それでも何故楓がデュエマを教えて欲しいのかは謎だった。飛鳥がプレイヤーだろうか？

「簡単な理由よ、ただやってみただけ」

一瞬の沈黙が流れる。

「それだけ？」

「うん、それだけ」

彼女の心は親友である飛鳥にも読めない。

紫のワンピースの少女は静かに笑みを浮かべていた。

「ふうん、つまりマナと呼ばれるエネルギーを貯めて、クリーチャーや呪文を駆使し、五枚のシールドを破って先に直接攻撃が勝つてことね」

飛鳥が20分ほどかけてした説明をなった一文で纏め、興味深そうにカードを眺める楓と苦笑いを浮かべる飛鳥。彼女達はかなり深いところから性質が違うようだ。

本来友人関係は、自分に性質が似ているものを選びがちなのだが、案外本当に気が合うのは真反対の性質のものなのだ。

「じゃあ実践してみよっか。さっき教えた五文明の中で楓はどれがいい？」

引き出しの一番下から大量のカードが入っているナイロン製の収納ケースを取り出した。

「うん。……闇かな？」

楓らしい文明のチョイスである。飛鳥は、収納ケースの中できつちりと小分けされているストレージBOXの中の、「闇文明のデッキ」と表紙に書かれている物を取り出す。そして、その中から一つデッキを楓に手渡した。

飛鳥は他のと違い何も書かれていないストレージBOX——“飛鳥専用”の中から、一つ赤いスリーブのデッキを取り出した。デッキ内容は火が中心なのだろう。

火と闇、これらは友好色と呼ばれる組み合わせだ。

“破壊や感情、自由”と“死や犠牲、利己”。まったく異なっているように聞こえるこの二つの文明も実は共通点がある。

友人関係でも同じだ。違う性質に思えても、意外に共通点があるものなのだ。

「ルールはさつき教えたとおりだからね！行くよ！」

互いにシールドを展開し終え、デュエルが始まる。

「決闘、スタート！」

「《霞み妖精ジャスミン》召喚。効果で破壊してマナを一枚増やすわ。そして《エナジー・ライト》で2枚ドロ〜ね」

前のターンに《霞み妖精ジャスミン》により、マナが増えている楓はさらに《霞み妖精ジャスミン》を使いブーストをした。そして《エナジー・ライト》を使ってその分失った手札を補充している。

彼女が使っているデッキは彼女の義兄が残していたデッキだ。しかし、飛鳥は使った事が無いのでデッキの内容は分からない。義兄はコンボデッキと言っていたそうだが。

「《レツピ・アイニー》召喚！効果で山札の上から三枚めくり、超次元呪文を一枚手札へ！」

めくった三枚の中には《超次元ボルシャック・ホール》があった。飛鳥はそれを手札に加える。

バトルゾーンには今召喚した《レツピ・アイニー》の他にセイバー：

ドラゴンとサムライを持つ《ポツポ・弥太郎・パツピー》が置かれている。

どうやら彼女のデッキは翔とデュエルしたときの《龍炎鳳エターナル・フェニックス》のとは違うようだ。

「《天真妖精オチャツパイ》を召喚して墓地から一枚をマナゾーンに。そして《百発人形マグナム》召喚するわ」

さらにマナを増やす楓、そして超次元メタカードの代表格である《百発人形マグナム》が召喚された。

これにより、飛鳥が《レツピ・アイニー》が手札に加えた《超次元ボルシャック・ホール》が撃ち辛くなる。

「う……………」

飛鳥は楓のプレイングに驚いていた。カードに初めて触れた楓がここまでうまく使いこなすとは、と。カードゲームの基礎であるドロートとブースト。相手の次の手を読みそれを制するためのメタカードの使用——。どれもこれもアドバンテージの重要性が理解できていないと出来ない事だ。

（……………でもっ！）

しかし、デュエマを始めた頃の頃と比べて彼女は成長した。幾ら楓がアドバンテージの重要性を理解できていてもまだ初心者だ。

「《マツハ・ルピア》召喚！」

アーマード・ドラゴンにスピードアタッカーを与える《マツハ・ルピア》が飛鳥の場に召喚される。これで次のターンに召喚される飛鳥の竜はすぐ殴れるようになった。

しかし、楓は落ち着いた対応を見せる。

「マナは十分あるわね。《終焉の凶兵ブラック・ガンヴィート》召喚」

クリーチャー版《ロスト・ソウル》といっても過言ではない程の手札破壊能力を持つ《ブラック・ガンヴィート》。「ノー・チョイス」による強力なフィニッシュ力を持つこのデーモン・コマンドが楓の使っているデッキの切札のようだ。

「私のターン！《超次元ボルシヤック・ホール》！《オチャツピイ》を破壊して、《時空の剣士GENJI・XX》^{ゲンジ}_{ダブルクロス}をバトルゾーンに！」

《百発人形マグナム》の効果により、何か1体飛鳥は破壊しなければならぬ。彼女は《レツピ・アイニー》を選択した。

《GENJI・XX》と《ブラック・ガンヴァイト》――。互いの切札が揃った。

「一斉攻撃！《時空の剣士GENJI・XX》《マツハ・ルピア》《ポツポ・弥太郎・パツピー》でシールドをブレイク！」

先に動いたのは飛鳥だ。楓のシールドのほとんどが吹き飛ぶ。

「……………」

一枚ずつ確認していく楓、黙って全て手札に加える。

「ターンエンド。そして、まず《時空の剣士GENJI・XX》の覚醒条件達成！」

裏返し、《剣豪の覚醒者クリムゾンGENJI・XX》へと覚醒する。

《GENJI・XX》の覚醒条件は“自分のターンエンド時に、自分のクリーチャーが全てタップされている”こと。彼女はその条件を達成させるために《マツハ・ルピア》を投入したのだ。

「次に、《マツハ・ルピア》の効果を解決。《剣豪の覚醒者クリムゾンGENJI・XX》を手札に加えるわ」

彼女のコンボはまだ止まらない。《クリムゾンGENJI・XX》はバトルゾーンを離れる時、山札の一番上を捲りそれがファイアー・バードならそのまま残る事が出来る能力をもつ。しかも、1体コスト7以下の火のサイキック・クリーチャー付きで。

「……………！！」

飛鳥は、慎重に山札を捲っていく。

「捲れたカードは《トット・ピピッチ》、条件達成！《時空の火焰ボルシヤク・ドラゴン》をバトルゾーンに出すわ！」

条件達成、《クリムゾンGENJI・XX》は場に残ったまま、さ

らにサイキック・クリーチャーが一体増えた。これで、バトルゾーンにあるサイキック・クリーチャーのコスト合計は21だ。

「超無限進化！《クリムゾンGENJII・XX》と、《ボルシャック・ドラゴン》を《超時空ストームG・XX》に！」

彼女にとつて、《クリムゾンGENJII・XX》はあくまでコンボパーツの一枚に過ぎなかったのだ。

《超時空ストームG・XX》の、“コスト20以上になるように、サイキック・クリーチャーを一体以上選び、その上に置く”という進化条件を達成するための。

「……ターンエンド」

満面の笑みを浮かべる飛鳥。コレほどのコンボを決めるのはそれだけ難しいのだ。

圧倒的なピンチに立たされる楓。いくら初心者とはいえこの状況がどれだけ危ないか彼女にも分かっているだろう。

しかし、彼女は表情を崩さなかった。自分の手札とバトルゾーンを見つめるだけだ。まるで相手には関心の無いように。

「私のターン——」

現在、彼女のバトルゾーンにあるのは《終焉の凶兵ブラック・ガンヴィート》と《百発人形マグナム》の2体。そしてマナは9枚。彼女はこれから、5枚ある手札のうちのたった一枚のクリーチャーを使いこの状況をひっくり返す。

「《大河海嶺・K・アトランティス》を召喚するわ」

バトルゾーンに出された《大河海嶺・K・アトランティス》は、破壊された時に相手のクリーチャーを全てバウンスする能力を持っている。その効果が発動すれば、十分にこの状況に対抗できるだろう。しかし、彼女の手札にはこの《K・アトランティス》を破壊するためのカードは無かった。そう、彼女の手札には。

「マナ爆誕、《陰陽の舞》を召喚。ねえ飛鳥、一つルールの確認を

しても良い？」

「？」

「“マナ爆誕0”は、コストを支払っていないことになるのかしら？」

「……………！！！」

ケケケケ——。《百発人形マグナム》から声が聞こえる。飛鳥は刹那、そんな奇妙な感覚にとらわれた気がした。

「《百発人形マグナム》の効果が発動するわね。じゃあ、《大河海嶺・K・アトランティス》を破壊するわ」

飛鳥のクリーチャーが全て吹き飛ぶ。今の彼女には、《ポツポ・弥太郎・パッピー》も《マツハ・ルピア》も、《超時空ストームG・XX》もない。

「さらに《終焉の凶兵ブラック・ガンヴィート》で飛鳥に攻撃。じゃあ、手札を捨ててね」

互いの大量にあった手札が全て墓地におかれる。シールドをブレイクされたことにより多少飛鳥の方が手札が多くなっているが、状況は完全に楓に傾いている。

「手札から捨てられたので効果発動！《翔竜提督ザークピッチ》をバトルゾーンに！」

飛鳥も反撃に出る。しかし、それは意味を成していない。

「《百発人形マグナム》の効果発動。クリーチャーを1体破壊してね、飛鳥」

「……………っ！」

“楽しみたければ、代償を支払わないとな。”

何をして、今の飛鳥は阻まれてしまう。この狙撃手によって。

「私のターン……………」

《翔竜提督ザークピッチ》により手に入れたカードでも、今ドロ―したカードでもこの状況をひっくり返す事は出来ない。

「……………ターンエンド」

飛鳥は、完全に意気消沈してしまった。

「じゃ、《終焉の凶兵ブラック・ガンヴィート》で飛鳥を攻撃。残りのシールドを全てブレイクして《百発人形マグナム》でトドメね」最後はアツサリとした淡泊なトドメだった。楓と飛鳥のデュエルはコレにて終結した。

太陽の光が徐々に薄れ、部屋も辺りも薄暗くなっていた。楓はもうその部屋に居ない。用事があるので帰ったのだ。

飛鳥は自分が負けた原因をずっと考えていた。勉強机に乘せられた、自分のデッキに向かいながら。

《超時空ストームG・XX》を出すまでは完璧な流れだった。しかし、負けてしまったのはその後のことを考えていなかったからだ。ふと、飛鳥の脳裏にあるカードが頭をよぎった。目の前のデッキの中から、一枚のカードを引き抜く。

“戦いとは、常に二手三手先を読んで行うものだ。そして勝者と敗者は、その次の四手五手を読みきれるかで決まるのだ！”――

――《変幻の覚醒者アンタツチャブル・パワード》だ。

楓は常に二手三手先を読んでプレイングしていた。彼女をデュエマの道に一步進めさせてくれた友人、翔の様に。

カードを持っていない方の腕を握り締める。コレでは、まだまだ兄を超える事は出来ないだろう。

しかし、幸いな事にまだ彼女には強くなれるチャンスがあった。

楓はあのデュエルの後こんな事を言い残して去っていったのだ。

「デュエマ、面白かったよ」と。

楓は滅多に面白いと言わない。飛鳥の記憶が正しければ、トランプと本に関して言った事があるだけだ。

だから、楓と遊ぶ時はいつもトランプのゲームをしていたのだ。それ以外は一度やっただけで二度と興味を持ってくれない。

その彼女がデュエマに興味を持ってくれた。つまり、それはデュエマを始めるということ。

彼女の周りにプレイヤーが増えるという事だ。
床に置かれた楓が使っていたデッキを見つめ、飛鳥は笑みを浮かべた。

Level 5 - 1 : 彼女達の休日（後書き）

まず始めに、読者の皆様にお詫び申し上げます。
前回の後書きをご覧になればお分かりになると思いますが、致命的なミスが発覚しました。

今回の話で登場する黒崎 楓（Kurosaki Kaede）は前回の本文中では“生徒会長”として登場していましたが、彼女は中学2年生になったばかり。普通の公立学校では2年の始め頃に生徒会長になるのは不可能なのです。

なので、“生徒会役員”として修正させていただきました。ご了承ください。

それでは、今回楓が使っていたデッキをどうぞ！。

『Black Requiem』

■クリーチャー

3 / 闇《終焉の凶兵ブラック・ガンヴィート》

3 / 水《大河海嶺・K・アトランティス》

2 / 闇《超神星DEATH・ドラゲリオン》

3 / 自然《陰陽の舞》

3 / 闇・自然《腐敗無頼トリプルマウス》

3 / 闇《百発人形マグナム》

3 / 闇《解体人形ジエニー》

3 / 自然《天真妖精オチャッピー》

3 / 自然《霞み妖精ジャスミン》

3 / 水《アクア・サーファー》

■呪文

3 / 自然《ナチュラル・トラップ》

1 / 自然《母なる紋章》

3 / 水《エナジー・ライト》

3 / 《エマージェンシー・タイフーン》

使い方は本文を見てくだされば分かります。

ワンポイントは《超神星DEATH・ドラゲリオン》。もしコンボを決めた後に相手が再び展開しても、コイツで吹き飛ばしちゃってください。

いつの間にか前回から2ヶ月経ってしまいましたね。次の更新はもっと早くしたいと思っているので楽しみにしてください！

Level 5 - 2 : 彼の祝日と彼女 (前書き)

この小説は『デュエル・マスターズ』を題材にした小説です。

あくまでもフィクションです。

実在する地名、氏名年齢住所電番などとはまったく関係がありません。

なおカードの効果などはココ(<http://www27.atwiki.jp/duelmasters/>)で調べるといいと思います。

Level 5 - 2 : 彼の祝日と彼女

ズズズズ——。紅茶をすする音がする。
半分ほど無くなったカップの中からは、まだ湯気がたっていた。
それを持つ翔は何か思い詰めているようだった。

Next Level へ輝ける切札へ

カップを持った腕を木製のカウンターに下ろし、一息つく。
ここは『トランプ』のカウンター。そのカウンターで翔は再び紅茶をすすっている。まだ他の学校では授業をしている時間なので、店には彼以外誰も居ない。この前の大会とは違い、海のように青いYシヤツに炎のように赤いネクタイを締めている。正反対、まさに「Cool & Heat」。

カウンターから真反対にある壁の色とマッチしている2つのコンポからは、ゆったりとした曲調のクラシックが流れている。

大会や子供達が集まっている時間帯は賑わいにより打ち消されまったく聞こえないが、普段はこんなにも優雅なお店なのだ。

二つあるコンポの間には茶色い本棚があり、ファンタジー系や推理小説などを始めとする数々の名作が揃えられている。もちろん、『デュエル・マスターズ』のマンガ、攻略本等もだ。

『トランプ』は他のカードショップとは違い、商品の殆どがもはや「デュエマ専門店」と言っても過言ではないほどで『デュエル・マスターズ』で揃えられている。

その理由は誰も知らない。この店の禁忌^{タブー}だ。

「どうしたのですか？ そんな浮かない顔して」

グラスを磨きながら話しかける女性は店長——鈴宮 麗奈だ。

二十代前半と言われてもおかしくないその容姿と落ち着いたその口調を比べるとかなりギャップが激しい。彼女の本当の年齢は秘密。

タブー
禁忌だ。

店長の他に男の店員が一人——この前の大会でジャッジを行っていた——が床のモップがけをしている。

「店長——」「？」

手に持った紅茶をゆっくり皿の上に戻した。手にはデッキが握り締められている。その目には何かが秘められているようだった。

「俺と ボルバルザーク 無双竜機 でデュエルをしてください」

『トランプ』にある数ある秘密、それを知る方法が一つだけある。

ボルバルザーク 無双竜機 と呼ばれるものだ。

ルールは簡単。店長とデュエルをし、勝つこと。たったそれだけで店長から知りたい秘密を一つ教えてもらう事が出来る。しかし、リスクが無いわけではない。負けたら店の奉仕を一つさせられるのだ。チャンスは一日一回。

かつて『トランプ』にいた荒井 政雄という人物は、毎日このルールに挑戦し破れ、毎日奉仕活動をしていたのを翔は今でも覚えている。

このルールで彼女に勝てたのはただ一回、三年前に居たある青年だけだった。翔は彼の名前を覚えては居なかったが、彼のデュエルは今でも鮮明に記憶している。

「珍しいわね、翔君がこれで挑むなんて」

翔がこのルールでデュエルしたのは殆ど無かった。たまに友人に頼まれてしたことを除いて。この店の秘密に興味が無かったからだ。しかし今日は事情が違う。それは先日、ある光景を目撃してしまっただから——。

——昨日は、翔の部活である「硬式テニス部」の練習日があった。その日の気温は28度。夏の近づきを感じさせられた。

日も暮れ、ラケットバックを背負い、翔は一人で家に向かういつも

通りの道を歩いていた。

翔の家は学校をはさんで『トランプ』の真反対にある、どこにでもあるようなありきたりな家だった。ただ、地主だった家系により、他の家より土地が広いという事を除いて。

鍵を開け、靴を脱ぎ、リビングの中に入る。重いラケットバックを隅に置くと、翔はテーブルの上に置かれているメモ用紙の存在に気付いた。

“ 駅前のレストランで待っている ” —— 父親からの伝言だった。

「先に言ってくれ」と苦笑いしながら、翔は急いで汗でべたべたのウェアから着替え、急いでレストランに向かった。

夕日に包み込まれた町で、赤い自転車が風を切る。

駅は学校の真反対側、『トランプ』よりもさらに先にあつた。夜の世界に切り替わっていく町の景色を眺めながら翔はペダルをこぎ続けた。

コンビニを横切り、ついに『トランプ』が見えてくるところまで来た。だいたい50m先だ。

もう店は閉まつており、「カードショップ」ではなく夜の「バー」としての準備が始まりだしている頃だ。

ペダルをこぎながら不意に翔は二階に視線を移してみた。『トランプ』の二階は事務室になっていると聞いた事がある。もちろん店員以外立ち入り禁止であり、翔達は一度も入った事が無い。

昼間が暑かったせいかわ窓が開いており、中の様子がはっきり分かる様になっていた。空は夕色から暮色へと移り変わり、辺りはさらに暗くなつていった。

店長が誰かと話している。髪はいつもとは違い、ポニーテールで纏められているようだ。

相手の姿は窓の淵で隠れており分からない。しかし、メガネだけはみ出して見えている。

メガネの位置から座っていることははっきり推測できる。

店長の口の動き等から、ただの会話だという事はすぐに分かる。店員と会議しているのだろ。副店長はメガネだったはずだ。

翔がそう結論を出したとき、話し相手が椅子から急に立ち上がった。ちようど店の前を通り過ぎようとしていた時だった。すぐに奥に入ってしまったので一瞬しか見られなかったが、翔にははつきりと分かった。

灰色の地味なＴシャツ、青チェックのパーカー——優也だった。

「どうした？元氣ないぞ」

翔の父親が和風パスタを巻いた右手のフォークを口元に寄せながら話しかける。

別に元氣が無いわけではない。考えていたのだ。何故あの場所に優也がいたのかと。

「いや、大丈夫だよ。ただ考え事をしていただけ」

翔は一度も彼の家を訪れたことがなかった。彼がいつも帰り際にどこに行くのかも知らなかった。

しかも、彼がクラスで家族の話になるのを、少し避けているのにも翔は気が付いていた。

左手のコンスメスープを飲み干す。それを知るには一つしか方法が無い——。

「ん……………」

顔を少し上げ顎に手を置き、考える仕草をする。彼女にもこのルールを拒否する権利がある。かつて、金曜日の夜に必ず訪れる茶色いコートの男の正体でこのルールに挑んだ時、彼女はきっぱりと拒否した（ちなみにその時デュエルしようとしたのは荒井だった）。

翔は昨日完成した新しいデッキを握り締めて、彼女の導き出す結論を待っていた。苛立ちも何も無かった。ただ、彼は知りたいだけだったのだ。

「いいですよ、じゃあ負けたらティーカップ磨きをお願いしますね」
右手を伸ばし、太いゴム二本で右足の太腿に固定されたデッキケースの中からデッキを取り出し前に構える。

目の前にあったオシャレな小物を横に退け、デュエル出来るスペースを確保した。

「デュエマ、スタート！」

「《未来設計図》発動！山札から《コッコ・ルピア》を手札に」
先行をとったのは翔。安定した動きで必要なカードを確保する。
対する店長は既にバトルゾーンに《凶戦士ブレイズクロウ》が召喚されている。

「《コッコ・ルピア》……ドラゴンですか？珍しいですね。では私のターン、《無頼勇騎タイガ》召喚します。そのまま2体でシールドに攻撃です」

開始からたった2ターンで2枚もシールドが失われてしまった。召喚された2体のクリーチャー、マナにあるカードから推測すると、

「赤緑速攻」らしい。

「赤緑速攻」は速さに特化したデッキで、相手が動き出す前に殴り倒せる強力なデッキタイプだ。

「——S・トリガー発動！《アクア・サーファー》！対象は《ブレイズクロウ》に」

しかし、彼が速攻対策をしていないわけではない。大会用に組んだ“新作”なのだ。

翔のターンが回ってくる。

「《コッコ・ルピア》を召喚して、《アクア・サーファー》で《タイガ》に攻撃、相打ちです」

店長のバトルゾーンが空になり、攻撃の波を止めることが出来た。しかしまだ油断は出来ない。

「《襲撃者エグゼドライブ》召喚、シールドをブレイクします」
シールドがまた削られる。翔のデッキにはブロッカー等の防御カー

ドは入っていない。すべてS・トリガー頼みだ。短期決戦——店長がどれだけ削れるか、翔がどれだけ凌げるかが勝負の鍵となってくる。

「残り2枚、大丈夫ですか？」

ターンが終わったので、《襲撃者エグゼドライブ》が手札に加えられる。手札破壊がない翔のデッキではS・トリガーを除いて除去する術が無い。

通常のデュエルのならばここで汗を掻き始めるところだろう。しかし翔は表情一つ崩さない。逆に落ち着いている。なにか策でもあるのだろうか？

「俺のターン——《ボルト・紫郎・バルツ》召喚！」

仕事を放棄し、この珍しいデュエルをボーッと眺めていた店員はここで気が付いた。翔が何を狙おうとしているのかを。

「出た時の能力で《竜装シデン・レジェンド》を手札に！」

彼が狙っているのはワンショットキル、「紫電」だ。

ワンショットキル。それは「1ターンで相手のシールドを全て破り、勝利する」という事。

コンボデッキや長期戦向きのデッキ等が得意とする戦術だ。

彼はあまりこういった戦術からは敬遠していたはずだった。それは、一度にシールドを全てブレイクするよりも、アドバンテージを稼ぎながら何度もシールドを破りに行った方が逆転される可能性が低いと考えているから。元々、翔はビートダウンを好んで使用している。あまり後半に力を発揮するデッキは向いていないのだ。

しかし、「紫電」は別だ。

俗に「紫電ワンショット」と呼ばれているデッキは、安定した動きをしながら5ターンでワンショットキルが出来る。数あるワンショットキルの中でも最速と言ってもいいほどの速さだ。

しかも「速攻」とは違い、パワー負けはしない。例えば「紫電」が除去されていても、次のターンにまだチャンスはある。

つまり、殆どビートダウンに近いワンショットキルなのだ。しかも、「紫電」は火と水両方に存在している。翔が使わないはずが無い。

「——「紫電」ですか、厄介ですね」

彼女は薄い笑みを浮かべてカードを引く。このターン、彼女は《エグゼドライブ》《ブレイズクロウ》を召喚し、1枚シールドを削った。赤緑速攻は除去よりもスピードに特化したデッキなので、ワンショットキルを防ぐ術は無い。今は4ターン目。このターンに決めないと負けてしまうが、2打点足りない。「紫電」を止める術は無かった。

「いくぜ！《ボルバルザーク・紫電・ドラゴン》召喚！」

翔の手札から出されたのは紅の「紫電」だった。

「侍流ジェネレートで《竜装シデン・レジェンド》を場に、そしてそのままクロス！」

《竜装シデン・レジェンド》は「紫電」にタダでクロスすることが出来る効果を持つ。まさに「紫電」専用の剣だ。クロスギア

「《紫電・ドラゴン》で攻撃！まず《シデン・レジェンド》の効果でシールドを1枚ブレイクする！そしてそのままW・ブレイク！」ダブル

残り2枚。S・トリガーは当然の様に無い。

「攻撃時の能力で《紫電・ドラゴン》はアンタップする。——そしてもう一度攻撃！」

かつてトーナメントを荒らした伝説のドラゴン——そしてこのルール：無双竜機 の元となっている——《無双竜機ボルバルザーク》の血を《紫電・ドラゴン》は受け継いでいる。その“2度殴れる”効果は、《ボルバルザーク》の“2度ターンを行える”最凶の能力から来ているのだ。

《シデン・レジェンド》の効果でまたシールドがブレイクされる。残り1枚。

翔は視線を上げ、彼女の顔を見ようとした。少しでも焦りの表情が出ているのだろうか。——真逆だった。まったく焦っていない。逆に微笑を浮かべているようにも見える。何か策でもあるのだろうか

か？

「《紫電・ドラゴン》自身の攻撃で、最後のシールドをブレイク！」最後のシールドがブレイクされた。

「……………なっ！」

短い沈黙だった。ようやく声を出せた翔も、ほんの一字しか発する事が出来なかった。

彼の目は、彼女の掲げるカードに釘付けになっていた。

「S・トリガー、《靈騎コルテオ》です」

翔は視線を相手のバトルゾーンに向ける。今出された《靈騎コルテオ》を含め2体。

そして翔のクリーチャーも2体。

「前のターンに《ブレイズクロウ》を出しといて正解でしたね。《スーパー・スパーク》ならその必要もなかったのですが……。では、残りのクリーチャーをタップして下さい」

攻撃の手が完全に止められた。主導権がひっくり返る。

何故、「赤緑速攻」で《靈騎コルテオ》（彼女の話からも含めると《スーパー・スパーク》も）

がトリガーしたのだろうか？その理由は簡単である。このデッキは「赤緑速攻」では無いからだ。

このデッキは、かつてとある地域で——偶然にも——《無双竜機ボルバルザーク》に対抗するために作られたデッキ「ビートトリガー」と呼ばれていたデッキである。

その特徴は、通常の速攻と違い、速さに特化せずトリガーのワンチャンスを狙う所。

確かに通常の速攻は勝利することが出来る。しかし、トーナメント形式の大会では、強力なデッキタイプであるゆえに対策されており、必ず勝ち上がることが出来るわけではない。確かに他のデッキにも言えることだが、速攻ではそれが顕著に表れる。

《スーパー・炎獄・スクラッパ》や《地獄スクラッパ》が出る

前もそれは変わらない。大抵、防御を固められ殴りきれなくなるのだ。

しかし、このタイプは違う。ある程度までシールドが削れていれば、手札のスピード・アタッカーと併せ、トリガーの《ホーリー・スパーク》で逆転する事が出来る。実際にそれで実績も残っているのだ。プレミアム殿堂による《ボルバルザーク》の消滅により、このデッキタイプも衰退していったのだが、彼女は違っただけらしい。

構築済みデッキにより強化された「赤緑速攻」をベースに、《ホーリー・スパーク》の完全上位交換の《スーパー・スパーク》、そのクリーチャー版とも言える《霊騎コルテア》を加え、現代版の「ビートトリガー」が完成している。

「では私のターン。まず、手札から《冒険妖精ポレゴン》を召喚します。そしてそのまま進化、《機神勇者スタート・ダッシュバスター》に」

《ボルト・紫郎・バルト》がマナ送りにされる。しかし彼はそんなことはどうでもよかった。彼のデッキには、前述した「スクラッパー」系呪文のような複数除去呪文は無い。

つまり、ある一定のラインを超えられるとどうしようもなくなってしまう。

翔のシールドは1枚、彼女のクリーチャーは3体。つまり――、

「《ブレイズクロウ》で最後のシールドをブレイクします。」

100%は存在してしまう。

「ベースと他のドリンクがあるだけカクテルがある様に、カードがあるだけデッキもあるのです。大事なのは固定観念ではなく、柔軟な思考です。勉強になりましたか？それでは《スタート・ダッシュバスター》でトドメです」

普段からきれいなティーカップだが、その日は一段と増して輝いていた。翔が黙々と磨いているからだ。

店長はそんな翔を眺めながら、水筒から水を飲みながら（どうやら

見かねた副店長がそうさせたようだ）カウンター席に座っていた。あの店員は先程店長に一睨みされ、急いで掃除を終わらしている。（別にそこまで気になっていたわけではない。ただ知リたかっただけだ。なのに何故俺は無双竜機を挑んだのだろうか）

そんな店長を気にも留めずに磨きながら翔は考え込んでいた。

（別に裕也から直接効けばいい話じゃないか。でも……………）

何故か、裕也の口から直接聞いてはいけない気がしたのだ。

殆どのカップを磨き終わり、残りもあと僅かとなった頃、突然店の静寂が乱された。

誰かが後ろの階段から降りてくる。その音は一段と大きくなってきた。

他の店員だろうと思い、翔は振り向かおうとしなかった。しかし、直後に階段から聞こえてきたその声には心の底から驚かされた。

「麗奈さん、お客さん？……………つてあれ？翔？」

その声の主の方に勢い良く振り返る。青のチェックのパーカー、黒い眼鏡——優也だった。

話を簡単にまとめるところだ。「裕也は『^{「」}トランプ』に住んでいる”。

とある事情で、彼を彼女が里親として引き取ったそうだ。

その時、表情には出してはいなかったが、彼の瞳に悲しみが漂っているのに翔は気が付いた。事情は察する事が出来た。

ここは、彼女の店でもあり家でもあった。3階は彼女の自宅なのだ。だから、裕也はここに住んでいた。

「まあ、いずれ知られるだろうとは思っていたけどね……………」
苦笑いしながら裕也が呟く。

「……………」
沈黙が彼らの周りを包み込む。今はあの店員はモップがけしている音しか聞こえない

少し間を開け、ようやく翔は口を開いた。

「……優也、新しいデッキを作ったんだ。デュエルしないか？」

「え？……いいけど？」

あまりに唐突な一言だった。

「よし、じゃあデュエルだ。そういえば、新しい拡張パックの噂聞いたか？」

「いや、聞いてない。何それ？」

「昔のカードのリメイクを中心としたパックらしんだが……」

微笑みながら、店長が空になった水筒にお茶を入れるためにカウンターの向かいに戻った。彼女の手握られていたボトルにはきっちり「赤ワイン」と書かれていた。

「話がそれてない？今僕がここに住んでいることの話をしていたと思うんだけど……」

「確かにそうだな。でも、それを知ったからって俺はお前といつも通りに話しちゃいけないわけではない。そうだろ？これからも、そしていつまでも俺はお前と友達であり続けたいからな」

「翔……」

「分かったか？じゃあデュエルするぞ！」

その日の『トランプ』には、当たり前前の光景が流れていた。

Level 15 - 2 : 彼の祝日と彼女（後書き）

お久しぶりです。W - s w o r dです。夏が過ぎ、暦の上では秋になつてしまいました。

早いですね。まだまだ暑いですが。

ではまず告知から。もう少し話を進めたらLevel 11 : 『トランプ』、Level 12 : 蒼空を大幅に改定しようと思っています。

皆様は気付いていらつしやると思いますが、この「Next Level 1」の「輝ける切札」はよく改定されています。大抵は細かい描写等や台詞の微妙な変更などですね。初期の頃はまだ執筆に慣れていない部分があるので、多少おかしい表現が多々あります。そこを修正しているのです。

なので、だいぶ執筆にも慣れてきたので、大幅改定をしようと思っています。訳であります。

一応基本的なストーリーは一貫させているのではば問題ないと思いますが……………。ミスがあつたらドンドン指摘してください！

では今回の翔のデッキです。どうぞ。

『烈火蒼影』

■クリーチャー

3 / 《ボルバルザーク・紫電・ドラゴン》

2 / 《蒼神龍ボルバルザーク・紫電・ドラゴン》

2 / 《爆竜GENJI・XX》

4 / 《アクア・サーファー》

3 / 《ボルト・紫郎・バルット》

4 / 《ココ・ルピア》

3 / 《青銅の鎧》

■呪文

- 3 / 《超次元フェアリー・ホール》
- 3 / 《ストーリーミング・チューター》
- 3 / 《ジェスター・ブレイン》
- 4 / 《未来設計図》
- 3 / 《ナチュラル・トラップ》

■クロスギア

- 1 / 《バジュラス・ソウル》
- 2 / 《竜装シデン・レジェンド》

■超次元ゾーン

- 2 / 《時空の戦猫シンカイヤヌス／時空の戦猫ヤヌスグレンオー》
- 残りの超次元ゾーンはお好みで（、・ω・、

さて“それぞれの休日”シリーズも次回で最後（の予定）です。え？もうキャラがいなくて？いえいえ、いますよ。

少なくとも僕は名前が無くとも使い捨てにはしませんからね。それではまた次回！。

Level 5 - 3 : 彼ら (前書き)

この小説は『デュエル・マスターズ』を題材にした小説です。

あくまでもフィクションです。

実在する地名、氏名年齢住所電番などとはまったく関係がありません。

なおカードの効果などはココ(<http://www27.atwiki.jp/duelmasters/>)で調べるといいと思います。

Level 5 - 3 : 彼ら

夜、闇が訪れた。辺りが静寂に包まれる。僅かに光を灯す電灯が一つあるものの、それを除けば何物も闇を打ち消すものは無かった。

「……………はぎいつ！」

鈍い音があたりに響く。狭い路地裏に二人の男が居た。一人は頭を壁に打ちつけヘナヘナと座り込んでいる。もう片方の男はその頭に銃を構えていた。

「貴方はミッションに失敗したんです。分かっていますよねエ……

No number？」

男が装弾する。ガチガチと歯を鳴らす音が響く。

通りすがりの車のライトがその路地裏に差し込んで二人の顔を照らした。

座り込んでいる男の顔には見覚えがあった。服はボロボロになり薄汚れ、髪もボサボサではあったが——春の『ランプ』でのデュエルロードで、翔に倒されたあの男だった。

銃を構えている男の顔は見えなかった。というより見えるわけが無かった。

彼の顔には真つ白な仮面が嵌められていた。その仮面はまるで《アクア・ジエスタールーペ》の様。黒いスーツやネクタイ、白いワイシャツといった極普通の格好がさらにその「仮面」の異常さを際立たせた。

「『組織』のルールは理解していますよねエ？失敗^{イコール}死だと。……

まったく貴方には失望させられました」

仮面の男は銃をまるで玩具^{オモチャ}のように弄りだした。

No numberと呼ばれた男はまだガチガチと歯の音を鳴らし、怯えきつた目でその銃を見つめている。

「しかし……貴方はまだ正式な『組織』の一員ではない。一度だけチャンスを与えましょう」

その言葉が彼に衝撃を与えた。一体何を言っているのだろうか？

仮面の男がパチンと指を鳴らす。すると、僅かに光を灯していただけだったはずの電灯が激しい閃光を放ち、その影を照らし出した。そのパーカーも、ズボンも、首まで隠れるタートルネックの上着も、靴も……靴下でさえも、すべて黒に染まっていた。背は翔と殆ど変わらない。顔はフードに隠れていてまったく見えない。手には黒いスリーブに包まれたデッキを持っている。

「彼に勝てたら、その罪、帳消しにしてもいいですよ」

仮面の男がフェードアウトし暗闇に消える。No numberが立ち上がる。

これが最後のチャンスだ。生き残るための。

彼は、『組織』の実力を良く知っていた。例え、今この場を逃れたとしても、『組織』にいずれ潰されてしまうだろう。

時が経ち、闇がさらに深まる。音が消えていく。

No numberの場には翔と対戦した時とほぼ同じ様な状況が作り出されている。《白騎士の精霊アルドラ》が2体、攻撃した事によりタップされて置かれている。その攻撃で影のシールドは全て吹き飛ばされ、彼を守るものはもう何も無い。

次のターンの一撃でNo numberの勝利は確実となるだろう。対して影のバトルゾーンにはアンタップされている《ボルメテウス・武者・ドラゴン》と何故かクロスされていない《竜装ザンゲキ・マッハアーマー》しか置かれていない。

No numberのシールドは無傷の5枚。確実に勝利できるであろうこの状況に彼が満足した瞬間、その言葉が彼の脳裏に浮かんだ。“物事に100%等存在しない”——。あの時の翔の言葉だ。彼の頭から沸々と怒りが込み上げていた。全ての原因はアイツにあるのだ。彼に負けたことにより自分はこのようになっているのはアイツに負けたせいなのだ、と。

怒りがその言葉を打ち消した。

「——召喚」

刹那、No numberは何をされたのか理解する事が出来なかった。

全てのシールドが一度に吹き飛ばされた。まるで、元から何も無かったかのように。

彼に最後の一撃を加えるために、影は諸手を高々と上げる。その拍子に、フードがその頭からずり落ちた。

黒く透き通った瞳だった。彼の身につけている物よりも、この闇よりもさらに深い。

「0に還れ——。トドメだ」

その瞬間、彼は全てを失った。生命^{いのち}さえも。

座り込み震えだすNo number。

「嘘だ………、そんな馬鹿な」「そういうこともあるんですよ」
「！！！」

再び仮面の男が姿を現した。今度はその銃を、ピッタリNo numberの頭の右側面につけ狙いを外さないようにしている。

「貴方の負けです、No number。それじゃあ——
——死ね」

「待ってくれ、俺はまだッ」No numberは叫んだ、最期の言葉を。

暗闇に、銃声が響いた。

Next Level ｝輝ける切札｝

L e v e l 5 - 3 : 彼5 (後書き)

T o b e c o n t i n u e d . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2066r/>

Next Level ~ 輝ける切札 ~

2011年11月16日16時12分発行